

東京オリパラと多様性

大阪教育大学 神村 早織

東京オリンピック・パラリンピックには3つの基本コンセプト(全員が自己ベスト・多様性と調和・未来への継承)があった。なかでも、「多様性と調和」はダイバーシティという言葉が日本に広く浸透するきっかけとなった。2018年には東京都において、LGBTQ(性的マイノリティの総称)などに対する差別禁止を取り扱った人権尊重条例が成立し、日本が世界の人権基準に追いつくことを期待させた。たとえそれが東京オリパラ向けの取り繕ったものだとしても、これをきっかけに国内の人権状況を押し上げようと努力してきた人たちが多くいる。

しかし、この開会式をめぐる一連の辞任・解任報道は、「取り繕った」ものが綻んでいく様を剥き出しにした。許し難きは、障害者に対する性暴力をとまなう虐待行為を反省もなく喋ったこと、それが雑誌記事として出版されていたという事実、さらに今回それを「過去のいじめ」という表現を用いることで結果的に事実を隠蔽していることであろう。この事件は、「外向けのハリボテ」ではなく、私たちが自分たち自身で人権意識を確かめ合うことの必要性をつきつけたといえる。

「外向けのハリボテ」の象徴として、日本のアスリートにおけるLGBTQの問題がある。今オリンピックの舞台上でLGBTQであることを公表して参加する選手が増えている。ロンドン大会では23人であったが、2016年のリオ大会では56人と急激に増えた。この背景には、2014年、国際オリンピック委員会が「オリンピック憲章」を改訂し、性的指向への差別を禁止したことがある。その結果、今回、東京では、LGBTQであることを公表して参加する選手の数が増えることになったのだ。

しかしながら、現在のところ日本の選手団にはカミングアウトしたLGBTQの選手は1人もいない。国際的な潮流があるにもかかわらず、残念ながら日本がその中で「ガラパゴス」のように取り残されていることが分かる。声高に「多様性と協調」をかかげていたものの、現実の日本社会の中で、アスリートたちはその多様性をありのままに表現することができない環境にいる。

オリンピック選手ではないが、今、現役アスリートがSNSでカミングアウトを始めている。そのひとりが、女子サッカー日本代表・なでしこジャパンに所属し、現在アメリカで活躍している横山久美さんだ。横山さんは、自身の性自認については、「日本にいた時は隠していた」という。しかし、ドイツやアメリカでの選手生活を経て「ここではオープンにしているんだな」と感じたという。日本の後輩アスリートのためにも理解促進を目的として公表を決意したという。こうした行動こそ広報していく社会が求められている。